

2022年度 日本工学院専門学校											
A I システム科											
プロジェクト実習 1											
対象	1 年次	開講期	後期	区分	選択	種別	実習	時間数	60	単位	2
担当教員	岩堀 信一			実務経験	有	職種	システムエンジニア／プロジェクトマネージャ				
担当教員紹介											
担当教員は、主に金融分野・公共分野におけるシステム開発にシステムエンジニア・プロジェクトマネージャとして従事。提案、要件定義、開発、テスト、運用のシステムライフサイクル全般に渡る実務経験有り。米国PMI認定PMP、AWS認定ソリューションアーキテクト-アソシエイト、日本ディープラーニング協会G検定等の資格を有する。											
授業概要											
グループ学習の形式で、実習中心の授業を行う。グループで企画内容をまとめ、毎回進捗状況に関する報告プレゼンテーションを行う。完成品を作成するまでにプロトタイプを作成し、プロトタイプに関する中間発表も実施する。成果物を完成させられるだけのプログラミングスキルが必須となるため、不足技術は自ら授業外で能動的に学習することが求められる。											
到達目標											
地域連携やコンテスト出場を通して、メンバーで成果物を完成させることを目標とする。最後まで成果物を完成させることで、専門技術の向上を目指す。また、プロジェクト活動を通じ、学生間の問題解決力、対話力、合意形成力を身に着け、プロジェクトマネジメントの基礎技術を身に着ける。											
授業方法											
本講義では、学生の自発的学習を歓迎し、PBL（Project Based Learning）を実践する。地域連携・地域貢献、各種コンテスト参加など自分の関心が高いものを選択し、チームを組んでメンバーと協力してプロジェクトの実現を目指す。実学的専門能力の向上と共に、学生主体でプロジェクトの内容を企画することにより、問題解決力、対話力、合意形成力を身に着け、ファシリテーション技術の向上を目指す。											
成績評価方法											
試験・課題 50% 試験は実施せず、プロトタイプ、制作物について評価する 成果発表 40% 授業時間内に行われる発表方法、内容について評価する （口頭・実技） 平常点 10% 積極的な授業参加度、授業態度によって評価する											
履修上の注意											
授業中の私語や受講態度などには厳しく対応をする。理由の無い遅刻や欠席は認めない。講義に出席するだけでなく、社会への移行を前提とした受講マナーを守ることを求める。（詳しくは、最初の授業で説明。）また、グループ学習の形式をとるため、協調性も評価の対象となりうる。授業時数の4分の3以上出席しない者は定期試験を受験することができない。ノートPCは必携である。											
教科書教材											
資料を配布する											
回数	授業計画										
第1回	実施趣旨、目標、進め方、および評価方法を理解する。グループを決定することができる。										
第2回	制作してみたいアプリケーションやサービス、使ってみたい機材や技術を列挙することができる。										
第3回	出品するコンテスト、地域との連携などを決め、調達機材、製作期間、技術要素などの観点から、実現可能性を検討することができる。										
第4回	計画に沿って、技術調査、設計作業、プロトタイプの作成などを行い、アウトプットを出すことができる。										
第5回	計画に沿って、技術調査、設計作業、プロトタイプの作成などを行い、アウトプットを出すことができる。										

2022年度 日本工学院専門学校	
A I システム科	
プロジェクト実習1	
第6回	プレゼン資料やP Vの作成、デモの準備をし、リハーサルを行い、発表を行うことができる。
第7回	制作物が完成するまでの計画を作成し、計画の実現性について説明することができる。
第8回	計画に沿って、詳細設計、製造、品質評価などを行い、アウトプットを出すことができる。
第9回	計画に沿って、詳細設計、製造、品質評価などを行い、アウトプットを出すことができる。
第10回	計画に沿って、詳細設計、製造、品質評価などを行い、アウトプットを出すことができる。
第11回	計画に沿って、詳細設計、製造、品質評価などを行い、アウトプットを出すことができる。
第12回	計画に沿って、詳細設計、製造、品質評価などを行い、アウトプットを出すことができる。
第13回	プレゼン資料やP Vの作成、デモの準備をし、リハーサルを行い、グループ毎に制作物の発表を行い、他チームの発表を適正評価することができる。
第14回	プレゼン資料やP Vの作成、デモの準備をし、リハーサルを行い、グループ毎に制作物の発表を行い、他チームの発表を適正評価することができる。
第15回	成果物の整理・集約を行い、提出を終える。